

# 幼児期の教育を踏まえた小学校教育の在り方についての研究

—園での経験や学びを踏まえた架け橋期のカリキュラムの作成—

高知市立一宮小学校 教諭 福島 麻衣  
高知県教育センター 主任指導主事 彼末 りさ  
チーフ 難波江 明美

文部科学省は、義務教育開始前後の5歳児から小学校1年生の2年間は、生涯にわたる学びや生活の基盤をつくるために重要な時期とし、この時期を「架け橋期」と示している。本研究は、園での経験や学びを途切れさせることなく小学校へ接続するために架け橋期のカリキュラムを作成することを目的としている。小学校の学習に関連する園での活動を把握するために5歳児の園での経験や学びを調査し、その内容を架け橋期のカリキュラムに反映させた。その結果、園での経験や学び、関連する活動を示した架け橋期のカリキュラムと経験や学びの接続を踏まえた小学校での実践の参考となる実践例の作成につながった。

## <キーワード>

架け橋期のカリキュラム、保幼小接続、園での経験や学び、育てたい力、話すことや聞くこと

## 1 研究目的

本研究の目的は、幼児期の教育で子供達が経験したことや学んだことを小学校教育へ円滑に接続し、園での経験や学びを踏まえた学習により、児童が主体的に学びに向かうことができる架け橋期のカリキュラムを作成することである。

### (1) 現状と課題

中央教育審議会では令和3年1月に、『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して』の答申をまとめ、2020年代を通じて実現すべき教育の姿を示した。現在、文部科学省では、1人1台端末の整備や小学校35人学級の計画的整備等を進め、多様な子供たちを誰一人取り残すことなく育成し、多様な個性を最大限に生かすため、「個別最適な学び」と「協働的な学び」との一体的な充実による、質の高い学びの実現に向けた取組を、着実に進めているところである。こうした学びの充実が図られる大きな節目にあって、最大限の配慮が必要となるのは、幼稚園・保育所・認定こども園といった施設類型を問わず、また、地域や家庭の環境に関わらず、全ての子供が格差なく質の高い学びへ接続できるようにすることである。とりわけ、教育基本法において「生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なもの」として規定される幼児期の教育と、小学校以降の教育とを円滑につないでいくためには、子供の成長を中心に据え、関係者の分野を越えた連携により、発達段階を見通した教育の充実という一貫性の基に、幼児教育の質的向上とともに、小学校教育との円滑な接続を図っていくことが必要である、としている。

「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）」（文部科学省、2022）では、「小学校との連携の取組を行っている園が約9割に上るなど、取組が進展」している等の成果がある一方、「幼稚園・保育所・認定こども園の7～9割が小学校との連携に課題意識」をもっており、「各園・小学校における連携の必要性に関する意識の差」があることや、「半数以上の園が行事等の交流にとどまり、資質・能力をつなぐカリキュラムの編成・実施が行われていないこと」等が述べられている。また、「スタートカリキュラムとアプローチカリキュラムがバラバラに策定され理念が共通していないこと」に加え、「幼児期の終わりまでに育ててほしい姿」だけでは、具体的なカリキュラムの

工夫や教育方法の改善方法が分からないという課題が挙げられている。

高知県においても、「第3期高知県教育振興基本計画第2次改訂版」(2022)において、ほとんどの小学校区で、保幼小の円滑な接続を図るためのカリキュラムの作成が進んだ一方で、幼児期の教育において育まれた資質・能力を踏まえ、小学校教育が円滑に行われるよう、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有するなど、子どもの経験や育ちをつなぐ組織的・計画的な保幼小連携・接続の取組を充実させる必要があると示している。そして、市町村教育委員会、保育所・幼稚園等や小学校が保幼小の円滑な接続に組織的に取り組むことができるよう、各地域における保幼小接続期カリキュラム等の実践・改善の取組を促進することを対策のポイントとしている。

## (2) 研究協力校の現状

本研究は、高知県内のA小学校に研究協力を依頼した。

A小学校の現状においても、国や県と同様の課題が見られる。園児と児童の交流活動や、引継ぎシートを活用した保育者と小学校教師の連絡会は行われている。しかし、園と小学校がそれぞれの交流活動のねらいや目標、交流を通して育てたい力の共通理解が十分にできていない。また、連絡会での引継ぎの内容は、子供の生活面や家庭環境のこと、特別支援の手立てや工夫が主となっている。そのため、小学校教師は交流活動や連絡会で、子供の園での経験や学びを引き継ぐことができず、幼児教育で育まれた主体性や身に付けた力が小学校での学習活動に十分に生かすことができていない。高知県教育委員会事務局幼保支援課の「令和3年度保幼小連携・接続の実施状況アンケート調査」では、スタートカリキュラムの作成や実践の工夫として、幼児の経験内容や関わり方について保育者から聞き取りを行った小学校は48.9%、作成や見直しを保育者と共に行った小学校は12.0%であった。園での活動内容や経験、関わり方について保育者に聞き取りをしたり、保育者と共にスタートカリキュラムを作成・見直しをしたりすることに関しては、半数以上の小学校が未実施である。

## (3) 架け橋期のカリキュラム

以上のことから、課題解決のためには、園での経験や学びを引き継ぐ場を設定し、保育者と小学校教師が互いの教育に対する理解を深めることが重要であると考えた。園での経験や学びを踏まえた学習活動を小学校で展開するためには、園での経験や学びを小学校へとつなぐカリキュラムが必要であるため、園での経験や学びを反映させたA小学校における架け橋期のカリキュラム(1学期分)を作成する。また、教師が架け橋期のカリキュラムを実践する際に、園での経験や学びの接続を踏まえた学習活動の展開や支援等の参考となる実践例も作成する。

A小学校では、書くことや聴き合い語り合うことを大切に「言葉の力」を育み、自己表現力を育成する研究を行っている。そこで、本研究では、A小学校で研究している「聴き合い語り合うこと」を、学校生活で児童が話したり聞いたりする場面に焦点を当てた「話すことや聞くこと」とした。そして、小学校教師と保育者が同じ子供について考えることができるよう、令和4年度の1年生を対象とした。

## 2 研究方法

### (1) 児童観察

A小学校1年生の入学当初の実態把握のために授業等を録画し、観察を行う。主に、授業中の教師と児童の発話や行動から、児童が園での経験や学びをどのように生かして学習活動等に参加しているかについて調査する。観察期間は、入学後のスタートカリキュラムの実施時期である4月の4日間とし、教師と児童それぞれの発話時間と発話内容を分析する。発話内容はカテゴリーに分類し、カテゴリーごとの発話回数を計測する。

### (2) 園へのアンケート調査及び聞き取り調査

対象児童が5歳児の時に、園で話すことや聞くことについてどのような力を身に付けてきたかを、

記述式のアンケート調査により明らかにする。

調査の対象は、A小学校への入学児が比較的多い校区内外の4園とする。4園の内訳は、公立保育園1園、私立保育園2園、認定こども園1園である。質問内容は、話すことや聞くことに関する次の三つの項目とする。

<一つ目>「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の中の、話すことや聞くことに関連する五つの項目「自立心」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「思考力の芽生え」「言葉による伝え合い」の観点から見られた次の三点

- ① どのような場面にどのような姿で現れていたか
- ② ①の場面で、保育者はどのような援助や環境構成（環境の再構成を含む）をしていたか
- ③ ①の場面で子供達はどのようなことを経験したり学んだりしていたと考えるか

<二つ目>話すことや聞くことに関して、保育者が意識して取り組んでいたこと

<三つ目>①目指す子供像、②大切にしていたこと、③子供への関わり

また、アンケート調査後、補足のために聞き取り調査を実施する。

### (3) 架け橋期のカリキュラムと実践例の作成

児童観察及びアンケート調査の結果を踏まえて、架け橋期のカリキュラムと実践例を作成する。児童の実態に沿ったカリキュラムと実践例にするために、アンケート調査の結果を踏まえ、A小学校1年生担任と協議しながら作成する。

架け橋期のカリキュラムの項目は、「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）」の「3-（2）開発会議で開発する架け橋期のカリキュラムのイメージ」を参考に、「育てたい力」「生活科を中心とした単元構成」「関連する園での活動」「園での経験・学び」「指導上の配慮事項」とする。

実践例の項目は、「園での学び」「育てたい力」「園での経験」「時」「本時のめあて・予想される児童の発言」「接続を踏まえた支援【その他の支援】」とする。「園での学び」と「育てたい力」の項目は、架け橋期のカリキュラムの「園での経験・学び」と「育てたい力」を反映させる。

## 3 結果

### (1) 児童観察

児童観察は午前8時から開始し、児童の登校の様子から、1日目は給食終了後まで、2～4日目は下校時まで実施した。4日間の観察の中から「発育測定」「自己紹介」「なかよし広場の使い方」「給食準備①」「国語（ひらがな）」「1年生を迎える会」「給食準備②」「学校探検①」「学校探検②」「学校探検③」の10種類の場面を選び、ビデオ記録から教師の発話と児童の発話を分析した。小学校の学習時間は1時間当たり45分であるが、観察期間は入学直後のスタートカリキュラム実施時期のため場面の時間に幅がある。

#### ア 教師と児童の発話時間

10種類の場面における教師と児童の発話時間を計測した（表1）。その結果、教師の発話時間は10種類の場面すべてにおいて児童の発話時間よりも長かった。教師の発話が一番長い時間は学校探検③で、教師の発話時間21分33秒と児童の発話時間3分45秒を合わせた発話時間の86%であった。児童の発話が一番長い時間は自己紹介で、教師の発話時間8分7秒と児童の発話時間3分9秒を合わせた発話時間の28%であった。

表1 教師と児童の発話時間

場面 (学習内容等)	場面の時間 (分)	発話時間		発話時間の割合 (%)	
		教師	児童	教師	児童
発育測定	27	12分42秒	41秒	97	3
自己紹介	19	8分07秒	3分09秒	72	28
なかよし広場の使い方	10	6分04秒	1分16秒	84	16
給食準備①	24	15分59秒	20秒	99	1
国語 (ひらがな)	21	8分54秒	2分47秒	78	22
1年生を迎える会	50	16分43秒	4分37秒	79	21
給食準備②	36	9分31秒	45秒	95	5
学校探検①	35	15分03秒	4分07秒	79	21
学校探検②	23	8分22秒	1分32秒	86	14
学校探検③	32	21分33秒	3分45秒	86	14

## イ 教師と児童の発話内容

10種類の場面における教師と児童の発話内容を、それぞれ三つのカテゴリーに分類し、回数を計測した(表2)。

## カテゴリーの内容

<教師>①「はい・いいえ」または単語で答えられる質問や発問(単語)

②文で答えられるまたは理由を付けて答えられる質問や発問や発話(文・理由)

③友達の発言に関わりを促すような質問や発問や発話(関わり)

<児童>①「はい・いいえ」または単語で答えている(単語)

②文で答えたり話したりしているまたは理由を付けて答えたり話したりしている(文・理由)

③友達の発言に関わって答えたり話したりしている(関わり)

発話時間は教師が児童よりも長かったが(表1)、カテゴリーごとの発話回数は児童が教師よりも多かった(表2)。教師の発話回数は少ないが、一度の発話時間が長い。児童は発話回数が多く、一度の発話時間が短い。また、教師が児童に友達の発言に関わりを促すような質問や発問や発話をしなくても、児童は友達の発言に関わって答えたり話したりしていた。

表2 教師と児童の発話のカテゴリーごとの発話回数

場面 (学習内容等)	場面の時間 (分)	教師の質問や発問や発話 (回)				児童の発話 (回)			
		単語	文・理由	関わり	計	単語	文・理由	関わり	計
発育測定	27	4	0	0	4	32	4	0	36
自己紹介	19	1	5	0	6	38	13	10	61
なかよし広場の使い方	10	1	2	0	3	30	19	8	57
給食準備①	24	1	0	0	1	5	4	1	10
国語 (ひらがな)	21	4	3	0	7	31	7	5	43
1年生を迎える会	50	5	1	0	6	23	38	5	66
給食準備②	36	2	4	0	6	28	11	8	47
学校探検①	35	2	2	0	4	60	42	14	116
学校探検②	23	2	4	0	6	18	21	1	40
学校探検③	32	13	5	0	18	74	65	11	150

## (2) 4園へのアンケート調査及び聞き取り調査

アンケート調査の回答から、どの園でも朝の会や帰りの会、遊びの中で、友達の前で発表する場を設定していた。また、ドッジボールやリレー遊びの中で、子供同士で話し合っただけルールを決めたり、意見が違ふ時には話をして折り合いをつけたり、遊び方やコツを教え合う経験をしていた。話している人の顔を見ながら聞くことや、話を最後まで静かに聞くことなど、聞く姿勢に関しても、保育者が子供達に教えたり伝えたりしているという回答があった。また、子供達で遊びを考えて決定し、行動することができるような環境構成や援助が行われていた。

回答内容を補足するために、作成する架け橋期のカリキュラムの項目の一つである「生活科を中心とした単元構成」の小単元の各学習に関連する園での活動や経験と園の施設について、3園に聞き取り調査を実施した。次の14項目の質問をし、実践例に反映させた。

【質問内容】①集団を作っていくために仕組んだ遊びには、どのようなものがあったか。

②人前で自分の名前を言う経験があったか。

③ICTを使った活動はあったか。あれば、その活動内容は何か。

④園内にどのような部屋があったか。また、その部屋への子供達の出入りは自由だったか。

⑤園にどのような遊具があったか。

⑥園で2階（階段を上り下りする経験）があったか。

⑦和式トイレを使う経験があったか。

⑧担任以外の職員と関わる機会があったか。あれば、その活動内容は何か。

⑨プールでどのような遊びを経験したか。

⑩プール以外の水を使った遊びはあったか。あれば、その活動内容は何か。

⑪夕涼み会や七夕祭りなど、夏の行事では、どのようなことを経験したか。

⑫一人で使える道具には、どのようなものがあったか。

⑬特に親しんでいた歌、手遊び、ゲーム、ダンス（音楽）等は何か。

⑭子供達が親しんでいた絵本は何か。

質問項目①、②は架け橋期のカリキュラムにおける「生活科を中心とした単元構成」の「みんなとなかよくなりたいな」、質問項目③～⑧は「がっこうたんけん」、質問項目⑨～⑫は「みずであそぼう」の小単元に、それぞれ関連する活動である。また、質問項目⑬、⑭は、学校生活全体に関連する経験や活動である。A小学校は3階建ての校舎で、洋式トイレに改修された棟もあるが、和式トイレが残る棟もある。校舎内を探検する際に、階段の上り下りや和式トイレの使い方について、どの程度の指導や配慮が必要なのかを調査するために⑥、⑦の質問項目を設定した。「みずであそぼう」の学習では、水鉄砲とシャボン玉の活動を取り上げるため、園で経験した季節の行事や遊びについて調査した。

その結果、どの小単元にも関連する園での経験や活動があった。実践例「みんなとなかよくなりたいな」の学習に関連する経験や活動として、集団でこいのぼりやいかだの制作をしたり遊びを考えたりする経験や、朝の会や健康診断の際に自分の名前を言う機会があった。「がっこうたんけん」の学習に関連する経験や活動として、園内のホールや職員室等、自分の部屋以外の部屋への出入り、順番や決まりを守って遊具で遊ぶことなどを経験していた。また、園の施設については和式トイレや階段の上り下りを経験している園もあった。「みずであそぼう」の学習に関連する水遊びの経験として、水を使った砂場遊び、染め物遊び、絵の具遊び、植物を使った色水遊び等があった。植物を使った色水遊びは、小学校の生活科でも取り上げられている。子供が親しんでいた手遊びや歌、絵本等については、具体的な題名や曲名等の回答を得た。

調査の結果を生かすことにより、小学校では同じ活動を繰り返すのではなく、使う道具を変えたり、試したことのない植物を扱ったりという工夫をすることができる。

### (3) 架け橋期のカリキュラムと実践例の作成

#### ア 架け橋期のカリキュラム（資料1）の作成

小学校で身に付けたい力を「育てたい力」とし、国語科における「話すこと・聞くこと」の目標と「園での経験・学び」に示しているアンケート調査の結果から分かった園での学びを踏まえ、スタートカリキュラム実施時期である4・5月と、教科学習への移行が進む6・7月に分けて「育てたい力」を示した。「生活科を中心とした単元構成」には、生活科を中心に合科的な学習を展開することができるよう、各教科の単元名を具体的に示した。「生活科を中心とした単元構成」の各小単元に関連する園での経験や学び、活動、行事等を反映するために「関連する園での活動」の項目を追加した。「話す・聞く活動の基盤となる園での経験や学び・指導上の配慮事項」以下の「園での経験・学び」の項目は、「話す・聞く経験」と「学び」の項目に分けた。アンケート調査の結果をもとに、「話す・聞く経験」には具体的な園での活動や経験を、「学び」には活動や経験から子供達が学んだことを示した。

#### イ 実践例（資料2）の作成

架け橋期のカリキュラムの「生活科を中心とした単元構成」の三つの単元の中から、「みんなとなかよくなりたいな」「がっこうたんけん」「みずであそぼう」の小単元の実践例を作成した。実践例の項目は「園での学び」「育てたい力」「園での経験」「時」「本時のめあてと主な授業の流れ」「接続を踏まえた支援【その他の支援】」とした。「園での学び」及び「園での経験」には、架け橋期のカリキュラムで示した園での経験や学びを具体的に示した。「本時のめあて・主な授業の流れ」には、園での経験を踏まえた授業の導入、展開、終末の大まかな授業の展開案を示した。

「接続を踏まえた支援【その他の支援】」には、園での経験や学びを生かし、児童の思いを引き出したり考えを促したりするための投げかけ方や、小学校で学びを深めるための指導の工夫、準備物等を示した。また、学習活動を展開する際の安全面の配慮や教職員の連携、小学校での指導事項などを、【その他の支援】とした。

#### ウ 1年生担任との協議

学校や児童の実態に合わせるために、架け橋期のカリキュラムと実践例について、A小学校1年生担任と協議した。架け橋期のカリキュラム案についての協議では、アンケート調査の結果から分かった園での経験や学びが架け橋期のカリキュラムに示されている事や、育てたい力が学校や児童の実態に合ったものかなどを確認した。実践例についての協議では、児童の園での経験や学びを示すことで、どのようなことに配慮して学習活動を展開したり、児童にどのように投げかけたりしたらよいのか参考になるという意見があった。

## 4 まとめ

### (1) 学校の現状と児童の実態把握

A小学校の既存のカリキュラムには示されていなかった具体的な園での経験や学び、活動、子供の姿を架け橋期のカリキュラムに示したいと考えた。本研究では、園と小学校の共通の視点を「児童にどのような力を身に付けさせたいか」と設定し、標準学力調査の結果や児童の実態等からA小学校の研究テーマ「話すことや聞くこと」に焦点を当て、架け橋期のカリキュラムを作成した。作成するに当たり、入学直後の児童観察で児童の実態を明らかにした。教師と児童の発話を分析した結果から、児童は教師や友達の発話に反応して答えているが、単語や短い文で話す傾向があることが分かった。児童観察は入学直後のスタートカリキュラム実施時期であり、初めての学校生活や学習活動について教師の指導や説明が必要なことに加え、単語や短い文で話す児童の思いや考えを教師が補足しているため、教師の発話時間が長くなり児童の発話時間が短くなるのではないかと考えられた。しかし園へのアンケート調査から、児童は5歳児の終わりに保育者の見守りや声掛け、仲介のもと、友達と話し合っただけ遊び方やルールを考えたり、自分の気持ちや体験を友達の前で話した

りしていたことが分かった。このことから、児童は園で身に付けた話すことや聞くことの力を、小学校入学直後でももっと生かすことができると考えられる。学校の研究テーマや標準学力調査等の結果や1年生担任からの聞き取りだけではなく、話すことや聞くことに関する児童の実態を把握する必要がある。

## (2) 架け橋期のカリキュラムの作成

話すことや聞くことに焦点を当てたA小学校における架け橋期のカリキュラムを作成するために、アンケート調査を行い、具体的な園での経験や学びを知ることができた。アンケート調査は「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の、「自立心」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「思考力の芽生え」「言葉による伝え合い」から話すことや聞くことに関連する内容について質問し、園で遊びや生活をとおして子供達にはどのような経験や学びがあり、どのような力が育っているのかを質問した。記述により回答を得るため、保育者に質問の意図や回答してほしい内容が伝わるように回答例を示し、具体的な場面や子供の姿、援助等の回答を得た。そこから話すことや聞くことに焦点を当てた小学校での学習活動の展開や、接続を踏まえた支援の参考とした。

学びの連続性を確保し、園での経験や学びを途切れさせることなく小学校へ接続するために、架け橋期のカリキュラムに「育てたい力」「生活科を中心とした単元構成」「園での経験・学び」「指導上の配慮事項」の項目を設定した。教師が接続を意識して実践に生かすために、小学校の学習活動に関連する園での経験や活動を示す「関連する園での活動」の項目を追加した。児童が園でどのような経験や活動をしてきたのかを知ることで、教師は指導や配慮を工夫し、より発展的な学習活動の展開につながることを期待される。「園での経験・学び」と「指導上の配慮事項」の項目にアンケート調査から分かった具体的な経験や活動、学びを示すことで、園と小学校で同じ活動を繰り返すことを避け、園での学びを基盤として小学校で学びを深める学習活動を計画・実践し、育てたい力の育成が可能となる。

作成した架け橋期のカリキュラムが、A小学校や児童の実態と合っているか、実践の参考となるか等について1年生担任と協議した。架け橋期のカリキュラムを教師が実践するに当たって、参考となる指導略案を作成したが、学習活動の展開や評価に焦点が向かい、園での経験や学びが指導略案に生かされないのではないかという課題が出た。そこで、園での経験や学びを踏まえた学習活動を展開し、保育者の援助や環境構成を小学校の教師が参考にすることができるよう、接続に関する項目に絞って三つの小単元の実践例を作成した。

## (3) 実践例の作成

実践例は、どのような場面で話したり聞いたりする子供の姿が見られたか、どのような道具を使ったことがあるのか等、園への調査で明らかになった場面や姿、経験などを架け橋期のカリキュラムよりも具体的に示した。園での経験や学びを踏まえた導入、展開、終末の「本時のめあて・主な授業の流れ」を示すことで、教師が接続を意識した学習展開をイメージし、発問や投げかけ方を工夫することができるようにした。児童が園での経験や学びを生かして学習活動に取り組むことで学びの連続性を確保し、目指す子供像の実現につながると考えられる。

実践例として示す三つの小単元に関連する園での経験や活動について、園への追加の聞き取り調査を行った。調査の結果を架け橋期のカリキュラムの「関連する園での活動」に反映したことで、小学校での「生活科を中心とした単元構成」の各単元と園での活動との関連が分かるようになった。そして、実践例の「園での経験」に具体的な園での経験や活動、子供の姿を示したことで、教師が園での経験や学びを意識して学習の中で児童の経験や学びを引き出すことができると考える。

架け橋期のカリキュラムと実践例について、A小学校1年生担任と2回目の協議を行った。架け橋期のカリキュラムは、園での経験や学びと小学校での学習とのつながりを見通すことができると関連する活動や園での経験や学びと「生活科を中心とした単元構成」との関連が分かりやすいこと等を確認した。実践例は、教師が学習活動の展開をイメージしたり、児童に自己決定させたり、

園での経験を引き出すための投げかけをすること等、接続を意識する上で大切にすることが分かるという意見があった。実践例を参考にすることで、話すことや聞くことの学習の基盤となる園での経験や学びを教師が把握し、学習活動の展開や接続を意識した指導や支援の工夫につながると考えられる。

#### (4) 本研究から得たこと

本研究では、園での経験や学びを踏まえた架け橋期のカリキュラムと実践例を作成することができた。これまで、アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムは園と小学校それぞれで作成され、理念が共通していなかったという課題を、園にアンケート調査及び聞き取り調査をすることで改善できた。1年生を担当する際に、児童に「園ではどうしていたの？」や「園でしたことある？」などと問いかけることはあったが、保育者から子供の経験や学びを聞くことはなかった。児童とのやりとりだけで幼児期の経験を引き出すことは、十分な接続とは言えない。園での経験や学びを調査することで、これまで把握できていなかった保育者の援助や環境構成、子供の姿を知ることができた。また、子供達が遊びの中で気持ちを伝えたり折り合いをつけたりする経験を重ねられるような援助や環境構成がされていることを知った。本研究では、話すことや聞くことに焦点を当てて園に調査をしたが、関連する活動は園によって様々であった。しかし、どの園でも保育者が子供達のやってみようという気持ちを大切に活動を設定することで、子供達が主体的に取り組むことができ、経験や学びを積み重ねていることが分かった。園での経験や学びの中には、児童が気付いていない学びや意識していない学びが多くあると考えられる。教師が、それらを児童から引き出すことは難しいため、保育者へのアンケート調査や聞き取り調査は有効である。

また、架け橋期のカリキュラムの作成の手順を示すことで、架け橋期のカリキュラムを作成するに当たって大切なことを明らかにすることができた。架け橋期のカリキュラムを作成するためには、保育者と小学校教師が互いの教育を理解し合い子供達の経験や学び、課題やこれから育てたい力について話し合うことが大切である。園と小学校が、子供の姿から共通の課題を認識し育てたい力を共有することで、それぞれのカリキュラムの理念がつながり子供の経験や学びを途切れさせることなく接続することができる。よって、園での経験や学びを生かした学習が小学校で展開され、子供達は身に付けた力を十分に発揮することができ、園での学びを小学校でさらに深めることができると考える。

#### (5) 課題

本研究における課題は次の二点である。

本研究では、対象児童を令和4年度小学校1年生として架け橋期のカリキュラムを作成したが、架け橋期のカリキュラムを小学校で実践するためには、毎年5歳児を対象にして園や学校、子供の実態に合わせて架け橋期のカリキュラムの見直しが必要となる。保育者と小学校教師が共に架け橋期のカリキュラムを見直し、改善をし、実践していけるかが課題である。また、調査方法も課題である。本研究では、児童の園での経験や学びを小学校の架け橋期のカリキュラムに反映させるために、アンケート調査を行った。しかし、アンケート調査を記述式としたことで、具体的な場面や姿について保育者が記録を読み返したり、記述したりするのに時間を要し、記入する負担が大きかった。小学校においてもアンケート調査を毎年実施し、分析することは、時間と人員が必要である。架け橋期のカリキュラムの見直しと改善のためには、保育者と小学校教師が互いの教育を理解し合い、取組を共有するための場を設定することが望ましいと考える。保育者と小学校教師が互いの取組の現状や成果と課題、子供の実態などを共有し、子どもの姿から共通の課題を認識し育てたい力について話し合うことで、育てたい力の実現に向かう架け橋期のカリキュラムを作成することができる。

文部科学省は5歳児から小学校1年生の2年間を架け橋期としているが、本研究で作成した架け橋期のカリキュラムは1年生1学期分であるため、2年間の架け橋期のカリキュラムの作成が課題



として残った。5歳児の架け橋期のカリキュラムの作成においては、保育者が小学校での学習活動や児童の実態などを把握することが必要となる。保育園と小学校が情報の交換や共有をする場合は、園と小学校が共に架け橋期のカリキュラムを作成し、経験や学びを接続するうえで必要であることは前述したとおりである。しかし、限られた時間で日々の保育や業務を行っている保育者や小学校教師にとって、連携や接続のための時間の確保は容易ではない。次に、小学校における架け橋期のカリキュラムの実践に当たっては、カリキュラムの見直しや改善、実践に向けて、前年度には育てたい力を園と小学校で共有しておくことが必要である。共通の育てたい力を実現するためにそれぞれの教育を実践し、育まれた経験や学びを引き継ぐことで、子供達の学びの連続性を確保することができる。交流活動で、園と小学校が交流活動のねらいや目標、交流を通して育てたい力を共通理解したり、職員研修の中に保育参観や授業参観を位置付けたりして、これまでの交流活動や研修の内容を工夫することで、時間を確保することを提案する。保育者と小学校教師の連携が、園での経験や学びの接続や架け橋期のカリキュラムの充実につながり、園での経験や学びを生かした学習活動により児童の学びが深まると考えられる。

※資料1～3のうち実践例（資料2）はHPに掲載

#### 【参考・引用文献】

文部科学省（2017）：小学校学習指導要領解説 生活編

文部科学省（2017）：小学校学習指導要領解説 国語編

文部科学省（2017）：幼稚園教育要領解説

内閣府・文部科学省・厚生労働省（2017）：幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説

厚生労働省（2017）：保育所保育指針解説

文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター（2018）：発達や学びをつなぐスタートカリキュラム

文部科学省（2022）：幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）

中央教育審議会初等中等教育分科会幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会（2022）：幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会一審議経過報告一

高知県教育委員会（2018）：高知県保幼小接続期実践プラン

高知県教育委員会（2022）：第3期高知県教育振興基本計画第2次改訂版

高知県教育委員会事務局幼保支援課（2022）：令和3年度 保幼小連携・接続の実施状況アンケート結果

横浜市こども青少年局子育て支援課幼保小連携担当（2022）：横浜版接続期カリキュラム実践事例集第8集～今と未来を生きる子どもの育ちと学びをつなぐ～